

統合失調症 原因の遺伝子

岐阜薬科大グループ マウスで症状確認

岐阜薬科大学（岐阜市）薬効解析学研究室の原英彰教授

（51）Ⅱ神経科学Ⅱらの研究グループは14日、統合失調症などの精神疾患の原因にかかわる遺伝子を見つけたと発表した。この遺伝子を持たないとマウスは、多動性になったり、記憶力が低下したりと、統合失調症と同じ行動障害が起きることを確認できたとい

う。同日付の米科学誌「プロセス」に発表する。

この遺伝子は「HBB-EGF」と呼ばれ、細胞の分化と増殖に関与する細胞増殖因子の遺伝子。これを前脳で欠損させたマウスは、正常なマウスに比べて、①においをかぐなどのコミュニケーション力の低下②運動量の増加③記憶力の低下など、統合失調症患者の3大症状が確認できた。さらに、「モノアミン」という感情表現に関与する伝達物質や「スパイン」と呼ばれる情報伝達神経が20〜40%減少し、この現象も統合失調症患者特有の症状と一致した。これまででも精神疾患の原因遺伝子は五つほど見つかったが、今回のように、精神疾患に多くの影響を与える遺伝子突き止めたのは初めて。研究グループは、このモデルを使い、精神疾患の原因解明や新薬の開発につながる可能性があるという。

平成21年10月15日（木）

朝日新聞朝刊33面